

時を刻むキセキ

はにすけ

僕には、忘れられない出来事がある。

タキシードの胸元に入れていた懷中時計を取り出すと、僕はそれを愛おし気に撫でた。

「またそれ見てる」

隣にいた僕の伴侶となる女性が、そんな僕を見て笑う。僕は「うん」と小さく頷くと、手の中にあるその時計を撫でた。

新しいのを買えばいいのにと何度か周りの人間に言われたことがあるが、僕は一度もこの時計を捨てようと思ったことはない。感謝しているのだ。この時計に。

この時計は十年前、当時僕が住んでいた町の一角にあった、アンティークショップで見つけたものだった。

ある日の高校の帰り道、その日は何故かいつもと違う裏路地を自転車を通って帰ることになった。そういう気分だった。その時に見つけたその店は、商売の気もなくひっそりと隠れるように佇んでいた。

用途のわからないものや、なかなか年季の入ったライトが店に並んでいたけれど、どれもその店から出ていきたくなさそう

な、よそよそしい雰囲気醸し出す空気の中で、ふと、その中でも一際古い懷中時計が光を反射して輝いていた。

それを掌の上に乗せると、突然、時計の針が逆回転を始めた。店内の古時計の針も逆回転し、客や店主の動きがすべて逆戻りする光景が、目の前でまるで映像のように流れていくのが見えた。

「え？」

走馬燈のようなそれに目を白黒させていると、僕の手を包み込む老婆のシワシワの手が目に見えた。

「あなた、気に入れたのね」

先程見た店主が目の前にいた。驚いて声も出せずにいた僕に、店主は人好きのする柔らかい笑みを浮かべる。

「あ、すみません。触っちゃいけないものでしたよね？」

僕が思わず謝ると、店主は首を横に振り、懷中時計ごと僕の手を優しく握り込んでいた手を見下ろした。

「いいえ、構わないわ。この子が最後の時間にあなたを選んだのだから」

店主が僕の手を離す。掌を開くと、時計の針は規則正しく動き出し、店主の目は温かく輝いていた。

「どうか、この子を持って行ってあげて。あなたの人生できっと役に立ってくれるわ」

僕はスピリチュアルなことに興味はないが、その言葉がやけに胸に刺さった。

時計は格安で譲つて貰つた。僕はそれを制服の胸ポケットに入れて過ごすようになった。この時計が妙に肌馴染みがよく、いつしか僕は、ひと時もこの時計を手放したくないと思うようになった。時計もそう思つてくれていたように思う。

そんなある日、僕は家から程近いコンビニに行く道すがら、交差点のど真ん中で財布を落としたおばあさんを見つけた。すぐに拾つて渡してあげようと思つたけれど、信号が点滅して赤になつてしまつた。車通りの多い場所だつたから仕方なしに足を止めると、横断歩道を渡りきつたおばあさんが振り返る。そこで、おばあさんは交差点の上にある自分の財布を見つけたようだった。おばあさんが「あ」と、いう顔をした。

そこからは、スローモーションのようだった。おばあさんが交差点へと飛び出し、トラックがおばあさんに突っ込んでいく。

「危ない！」

叫んだ瞬間、胸元が光つた。それはこの時計を始めて手にした時と同じ光景だった。チカチカと頭の奥で時計の針の音が響き、目の前の光景がスローモーションのように巻き戻っていく。気が付けば、信号待ちをしている僕の隣におばあさんが立っていた。

呆然としている僕の目の前で、おばあさんが横断歩道を渡っていく。呆然と見守っていると、交差点の真ん中でおばあさんがまた財布を落とした。

僕ははつとすると、慌てて横断歩道を渡り、真ん中に落ちて

いた財布を拾い上げて小走りで横断歩道を渡り切つた。

「あの……」

横断歩道を渡り切つてふうと息を吐いていたおばあさんに声を掛けると、おばあさんが振り返る。

「はい？」

「お財布、落とされましたよ」

そう言うのと「え？ ああ！」と、おばあさんが僕の手に握られていたものを見て、驚いた。僕の後ろで、トラックが音を立てて国道を走つて行つた。

「ご丁寧にどうもすみませんねえ」

「いえ、お氣をつけて。ここは車通りが多いですから」

「そうね、氣を付けるわ」

おばあさんは僕から財布を受け取ると申し訳なさそうに頭を下げる。おばあさんはそのまま歩いて、角を曲がつて消えていった。

僕は胸元から、時計を取り出した。時計は何食わぬ顔で、相変わらず時を刻み続けていた。

「今のは君がやったのかい？」

問いかけても答えは当然、返つて来ない。ゆつたりとした時間をチカチカと紡ぐ音がするだけだった。

この時計のことを知りたくて、僕はもう一度あの店へと足を運ぼうとしたけれど、その店を見つけたことは二度と、出来なかった。どこを探しても見つからなかったのだ。そこにあった店は

綺麗な更地になつていて、あの老婆がどこへ行ったのかも、店がどこに行ったのかも、もうわからなくなつた。

仕方なしに独自でインターネットを使って調べてみたけれど、そんな奇跡のような時計の話は、ついぞ見つけることが出来なかつた。

時計を持っている間、不思議なことは度々起つた。でもそれがいつ起こるのかは、僕にもわからない。いつだつてそれは突然だつた。

学校にいる時、町を歩いている時、頻度は数か月に一回あるかないかで、その内容も怪我を回避するものだったり、迷子を未然に防ぐような小さなものばかりだつたけれど、僕にはそれがまるでこの時計が何かに備えてウォーミングアップをしているようなものに見えるでなかつた。

それから数年後。高校を卒業して大学に通い始めた僕は、町を歩いていた。相変わらず胸ポケットにはあの時計を入れたまま、慣れない新生活に四苦八苦しながらなんとか過ごして、ようやく生活が落ち着いていた頃だつた。

時計が起こす不思議な現象は、その頃には年に一回あれば良いくらいの頻度に落ち着いていた。

だから殆ど時計が起こす不思議な現象のことは気にしなくなつていただけで、その日は妙に時計の調子が悪そうだなと思つていたことを覚えていた。秒針が止まつたりするようになって、時間が数十分、ズレた。

そのせいで、僕はいつも乗つていたバスの時間に間に合わず、乗り遅れた。次のバスは三十分後。それなら、歩いて最寄り駅まで歩いた方が近い。

「流石に寿命なのかな……」

僕は最寄り駅までの道を歩きながら、時計を見下ろした。秒針は動いているが、次またいつ時間がズレるかはやわからない。

アンティークだということもあつて、修理は受け付けて貰えないだろう。僕は時計を労わるように撫でて、胸ポケットにしまつた。

帰り道に、目の前に綺麗な女性がいるのが見えた。同じ大学の人だとすぐにわかつたのは、講義で何度か見たことがある人だつたからだ。でも、顔を見たことがあるだけで話したことはないし、向こうは僕の顔すら覚えていないかもしれない。

声を掛けるまでもない。見知らぬ男に声を掛けられたら恐怖でしかないだろう。

信号が青になつた。僕は早々にスマホを見てのんびり歩く彼女の横を通り抜けて、さつさと道路を渡り、工事現場の横を通り抜けた。振り返ると、彼女は横断歩道を渡っている途中だつた。ここでいつかのように時計が巻き戻つて、横断歩道で引かれそうになつた彼女を車から救えでもしたらお近付きになれるかもなんて不埒な考えが過つたが、当然そんな都合の良いことが起こるワケもなかつた。

不謹慎すぎる。

僕が自分で自分の考えを諫めたその時だった。背筋に寒気が走った気がした。

誰かの叫ぶ声があった。振り返ると、彼女の頭上から資材に使われていたのたろう鉄筋が落ちてくるのが見えた。

「あ……！」

声をあげるよりも先に、胸ポケットの中に入れていた懐中時計が突然強く光り輝いた。周囲の時間がゆっくり巻き戻っていく。

久々の感覚に僕は少しだけ呆然としたが、時計の力は知っている。僕は慌てて横断歩道へと戻る。横断歩道の向こう側に、彼女がいた。

先程見た光景の影響で、どくどくと心臓が煩い。信号が青になった。彼女はゆっくりと歩いて来る。僕は横断歩道を渡って彼女の前に立つと「やあ、こんな所で奇遇だね！」と、声を掛けた。彼女は顔を上げると怪訝そうな顔をしたが、僕の顔には見覚えがあったようで、すぐに警戒を少しだけ解いてくれた。

「……ああ、大学の」

「あ、僕の顔わかる？ こんな所で会ったのも奇遇だし、よ、良かったらお茶でもどうかな！」

「いえ、急いでいるので」

うん、彼女は正しい。いくら同じ講義を受けているとはいえ、こんな不審人物など相手にしちや駄目だ。けど、そう思われたとしても、僕にも引けない事情があった。

「そう言わず、なんとか」

「結構です」

彼女は不快そうな顔を隠しめせずにはしゃくると、僕の横を通り過ぎていく。

まずい。

僕は手を伸ばして、彼女の細い手を掴んだ。

「お願い！ 行かないで！」

「しつこいですよ」

その冷たい目に、一瞬怯んだ。けど僕は、気付けば必死に言い募っていた。だってこの後、この先で彼女の身に何が起こるのかを、僕は知っている。

「僕を信じて欲しい！ いや、信じられないのはわかっている！ でも信じて欲しい！ お茶はしなくてもいいから、そっちにはいかないで！」

「……あなた、何言ってるんですか！？」

彼女が僕の手を振り払う。そのまままた歩いて行くこととするのを、また手を掴んで引き留めた。信号は赤になっている。横断歩道の真真ん中で押し問答をしている僕らに、クラクションがけたたましく鳴らされた。僕が暴漢に見えているのだろう、車の中からガタイの良い運転手が出てくるのが見えた。

「もう、いい加減にしてください！」

彼女がそう叫んだ、次の瞬間だった。

悲鳴が辺りに響き渡り、空から落ちてきた鉄筋がクラクション

ンなんか比にならないくらいの音を立てて地面にのめり込む音がした。彼女が歩いていつていたとしたら、ちょうど下敷きになったその位置に。

彼女もそれがわかったのだろう。彼女は固まると、次に信じられないとでも言いたげな顔で僕を見た。

「……え？」

「びっくりした。大丈夫？」

「え、ええ……はい」

彼女の声は、震えていた。僕も、心臓が破裂しそうなくらい脈打っていた。

こんな時に気の利いた一言でも言えればよかったけど、その時の僕には余裕はなかった。

僕は落ち着かせるように胸元に手を伸ばすと、時計を取り出す。その表面を撫でて、ほうと息を吐いた。

「じゃあ急ぐのでこれで」

僕は少しだけ落ち着くと、逃げるように去ろうとした。そんな僕の手を、今度は彼女の手にもまれた。

「あ、あの、ちよつと、いいですか？ その……お札に、お茶でもお札。」

僕は何もしないで固辞しようとしたけど、彼女も引かなかった。洪々、僕は彼女とお茶することになったけれど、その日、どうして彼女を引き留めたのか、その理由を僕は彼女に、上手く伝えることは出来なかった。

時計はその日を最後に壊れてしまつて、時を刻むことはなくなった。きつと僕の大事な人の命を助けるために、僕にずっと付き添つてくれていたのだろうと、今ではそう思う。

「ねえ、そろそろ、その時計の話、聞かせてよ」

彼女は、僕にこの時計の買い替えを打診したことは一度もなかった。

あの時の出来事を上手く言えなかったにも関わらず、だ。なんとなく彼女も思うことがあつたのだと思う。

「そうだね。信じて貰えないかもしれないけど、君には聞いて欲しいな」

僕は時計を取り出すと、彼女の手を取つてその掌の上に乗せる。時計を撫でる彼女の指先は優しい。僕はいつかの店主にされた時と同じように、海中時計を彼女の手ごと、そつと握り込んだ。

